

「う……うん……んん、ん、あ……」

意識を失っていたキャロンが目を覚ましたのは月が傾き始めた頃だった。石畳の上でうつ伏せに倒れていた彼女は半ば寝呆けている頭を振りながらゆっくりと身体を起こす。

「こ、ここは……？あたしは、いったい……」

目を擦りながら、眠ってしまう前の記憶を辿ろうとするキャロン。その視界に、自分と同じ姿をした少女が映る。自分を見下ろしているその少女が夜の女王であると思いきすまで、数瞬の時間を要するほどに、目覚めたばかりの少女は意識が混濁していた。

「あら、ようやくお目覚めのようね。ふふふ、おはようキャロン。そしてお疲れさま。出産を終えた今の気分はどうかしら？」

サラの言葉を聞くと同時に、意識を失う前に自分が受けていた凌辱の数々が少女の脳裏へ一気に蘇ってくる。男に催眠術をかけられて自我を失い、幾夜に渡って犯し尽くされたこと、鏡に映し出された自分の痴態を見させられながら、肌に寄生した蛇によって凌辱されたこと、そして胎内に入り込んだ蛇に孕まされ、絶頂しながら魔物を出産したことを。

「え……あ、う、うそ、そんな……あたし……あたしは……」

座った姿勢のまま、震える手で自身の身体を抱く少女。その手は衣服に触れることがなく素肌を掴み、少女は自分が全裸で意識を失っていたことを改めて認識する。そして同時に、自分が忌まわしい出産絶頂によって意識を失い、今目覚めたばかりなのだということを確認してしまう。あたりを見れば、そこは変わらず石造りの神殿で、壁際の松明も煌々と灯っている。状況は何も変わってはいないのだ。

「そう、残念だけどこれは夢でも幻覚でもないわ。貴女はさつき、魔物の子を産んだの。しかも淫らに絶頂しながらね。貴女の出産シーン、綺麗だったわ……」

キャロンにとって残酷な事実を告げつつ、うっとりとした表情を浮かべて嗤うサラ。キャロンが淫蕩に染まり、絶頂に果てるたびに、魔道具の赤いチョーカーとガーターリングが魔力を吸い上げてサラへと供給しているのだ。笑いが止まるはずもなかった。

「いやあつ、そ、そんなの、いやあ……」

力なく幾度も首を振り、肩を震わせるキャロン。その姿を見下ろしながら、サラはまた一段と昏く妖艶な笑みを深くする。

「ふふふ、でもね、まだお楽しみは終わっていないのよ、キャロン。ほら、自分のお腹を見て御覧なさい。そこに何が見えるかしら？」

サラの言う通りに、目の前に置かれた大鏡で自分の身体を見るキャロン。すると先刻まで胎児のせいで大きく膨らんでいた子宮の上、サラに蛇を埋め込まれた時に爪で傷つけられた臍下のあたりに不思議な形の痣が浮かんでいた。

「え？……こ、これは何？えっ、き、消えないっ……この模様は何なの？」

その痣は赤く、子宮と卵巣を魔術的に凶案化した歪なハート形をしていて、少女の下腹部で妖しい存在感を示しており、見るからに忌まわしいと思えるものだった。思わず手で擦るが痣は消えず、不吉な予感に怯えながらも、サラに問いかけるキャロン。

「貴女の処女をラモー・ルーが奪った時、彼は貴女の子宮の最奥に淫呪を刻みつけたわ。貴女の身体を熟れさせ、芳醇な蜜を得られるようにね。そして、あたしが蛇を植え付けた事で魔力を受けて淫呪は増幅され、出産で抵抗を失った肉体に魔術を起動した。そう、これはね、貴女の肉体を淫らな肉体に作り替え、蜜奴隷へと貶める闇の魔術。淫紋よ」

「い……淫紋……？」

「淫紋は貴女の子宮と牝性を支配する為の魔法陣よ。それが体に現れたという事はね、キャロン。貴女を蜜奴隷にするための肉体改造が完成したという事なの。美しく淫らな身体を持ち、常に発情し続け、無意識に牡を誘い、牡の誘いを拒めず、牡に抱かれることを至上の喜びとし、抱かれ続けることで若さを保ち、牡のモノなしには生きていけない。貴女はそんな淫魔『サキユバス』の肉体に成ったの。どう？嬉しいでしょう？」

「う、うそ、嘘よ、そんなの、嘘！そんなこと、あるわけないわ！あ、あたしは人間よ、あたしが、い、淫魔の、サキユバスの身体になった、だなんて、そ、それに、み、蜜奴隷だなんて、そんな……こと……ある……わ、け、が……」

自分の身体が人間の物ではなくなったと言う、サラの凄惨な回答に思わず言い返そうとするキャロン。しかし、その口が次第に重くなってゆく。身体に、特に下腹部に違和感を覚えたのだ。恐る恐る下を向くと、忌まわしい淫紋がぼんやりと赤く輝き始めていた。

「ふふふ、言った所で信じる筈もないし、体験する方が早いわ。そう、それが淫紋の起動状態。発情の合図よ。その状態になってしまったら、もう抗う事は出来ないわよ」

「あ、あ……あつ、くう……う、うそ、こ、これ……ああつ、はあ、はあ、はあつ、あう……か……からだ……だんだん、熱くなって……だめ、うそ……こんなのって……ああつ、だめ、こんなの耐えられない……はあ、はあ、はあ、ううっ……」

淫紋の内側、下腹部に巻き起こったじんわりと重く、しかし熱いものは、あつという間に上半身へと湧き上がって一瞬のうちに全身を包み込み、少女の肌に汗が浮かぶ。こうなっつてしまえばもう身動きも抵抗も、口答えさえも少女には許されなかった。僅かにでも動けば、空気の振動さえも快感となって全身を貫いてしまう予感があったからだ。

「こ、こんなの、だ、ダメ、これ以上、熱くなっちゃ、ダメえっ……はあ、はあ、ああ、体が、疼いて、が、ガマンできなくなるっ……はあ、はあ、ああつ……」

「それが淫魔の発情よ。種族の本能から来るその強烈な疼きは、本来人間に耐えられるものではないわ。だから、そうなった貴女は牡に抱かれたくてたまらなくなるし、牡に貫かれ、精液を注がれてイキ果ててしまう他に、その疼きを鎮める方法はないの」

「そ、そんな……こ、これが……発情……はあ、はあ、はうっ、もう、だめ……ああつ、カラダが、熱い……い、淫紋の、奥が、疼いて……あ、あそこが……も、もう濡れて……はあ、はあ、こんなの、だめえっ……ううっ、んっく、あはあつ、ああ、んっ、あうっ、か、身体中がムズムズして……いやらしい気持ちになって来ちゃう……」

淫紋とその奥にある子宮を中心として湧き起こり、渦を巻きながら全身の隅々まで行き渡り、肉体と心を支配してゆく疼き。蜜奴隷による供給の合図であり、淫魔が牡のモノを、精液を求める本能を呼び起こすための発情である。人間には存在しない、牡の本能が求める抗いのような衝動に、少女の肉体だけでなく心までもが一瞬で吞まれてゆく。どくん、と鼓動が高鳴り、吐息は荒く、熱く、湿ったものとなり、瞳は潤み、目元と頬に赤いものが差す。唇が、喉が渴き、熱の籠った肌に湿った光が浮く。

「そ、そんな……あつ、くううっ！はあつ、あ、あうううっ！だめ、こ、これ、ひいんっ！や、だめ、止めて、これ、止めてえっ！ああつ、だめ、これ以上は、ああつ、あ、やあんっ、だめ、こんなの、いやあつ、ああつ、だめ、だめえっ！」

自分の身を抱くように、片手で自分の身体に触れた瞬間、キャロンの肉体はその僅かな接触を快楽に飢えていたかのように貪った。その結末として、少女は一瞬で軽く達してしまい、敏感になった肌は少女が喘ぎ、悶え、反応するたびに快楽を貪り尽くしてゆく。

「どうかしら？初めての発情は。身体が疼いて燃えるように熱いでしょう？貴女はこれからずっと、その身を焦がす熱と付き合っていくのよ。更に、発情すると貴女の体臭は発情香となって周囲の牡を狂わせるの。人間も魔物も、この臭いを嗅いだら貴女を犯そうと夢中になって襲い掛かって来るわ。ふふふ、良かったわね。相手に困ることはないわよ」

「はあ、はあ、はあ、そ、そんな……ああっ、うっ、くうっ、はあっ、はあっ、んっく、こ、これが、ずっと……？う、うそよ……ひうっ、か、身体が、元に、戻らないなんて、うっぐ、んうっ、はあ、はあ、ふあんっ！はあ、はあ、ああ……ううん、んああっ」

座り込み、自分の腕で身体を抱きしめながら、切なげな表情で震え続ける少女。吐息は荒く、幾度も肩を跳ねさせ、背筋を伸ばし、僅かな刺激でも快感として受け入れてしまう敏感な肉体に翻弄され続ける。臍下の淫紋は脈打ちながら紅く灯り続けて少女の肉体を煽り、無意識にもじもじと擦り合わせている太ももの付け根は既に蜜で湿り始めていた。

「はあ、はあ、はあうっ、つく、ああっ、か、カラダが、熱い……燃えちゃいそう……ダメ、こ、こんなの、がまんできない……はあ、はあ、ああ、ふう、ううっ、あ、あたし、もうダメ……子宮が疼いて……たまらない……お、お願い、も、もう……」

「ふふふ、これだけいい反応してくれると、貴重な魔力で淫紋を活性化させた甲斐があるわね。ほら、キャロン。そろそろ牡のモノが欲しくなって来たでしょう？貴女の淫らな子宮にいっぱい精液を注ぎ込んで孕ませてくれるような、太くて逞しいモノでアソコを貫いて欲しいのでしょうか？それなら、淫魔の蜜奴隷らしく懇願して御覧なさい」

「ああっ……逞しい、モノ……ほ、欲しい、欲しくて、たまらないっ……はあ、はあ、あ、あたしは、淫乱な牝猫で、い、淫魔で、蜜奴隷ですっ！……だから、お願いっ！熱くて、逞しい牡のモノで、あたしのアソコを貫いて、何度もイかせて、濃い精液をあたしの淫らな子宮に注ぎ込んでくださいっ！身体が疼いて……もう、我慢できないのっ！」

淫魔の発情によって少女は身体中が疼いてしまい、牝の本能が犯される事を切望してしまふ。そこをサラに誘導されると、キャロンの心は容易く溶け落ち、陥落してしまった。そして少女は自らの欲望を肯定し、最大の敵に向かって凌辱を懇願してしまふ。

「あらあら、はしたない子ね。まだ我慢すると思ってせっかく色々準備したのに、そんなにあっけなく屈服されるとこちらが拍子抜けしちゃうわ。まあ、元々快楽に弱くて淫乱な貴女が発情の飢えを我慢できるはずもなかったわね」

ラモー・ルーに処女を散らされて以来、淫呪によって絶えず快楽に身を侵され続け、性欲を肯定され続けた少女は恋を知る前に牝の悦びに目覚めさせられてしまっていた。淫紋を刻まれて人間のまま淫魔の身体へ堕とされ、発情という本能から来る飢えを覚えさせられた少女が性欲という衝動を我慢することなどできる筈もなかったのだ。

「はあ、はあ、はあ、お、お腹の奥が、子宮が、きゅんきゅんして……背中が、ぞくぞくして、か、身体中が、敏感になって……あ、あたしのカラダ、どんどんエッチになってく……ああ、ダメ、エッチしたくて、精液欲しくて、おかしく、なるうっ……こ、こんな状態で犯されたら……ああっ、あたし、はあ、はあ、こ、こわれちゃう……」

少女の身体は既に発情の飢えによって支配され、子宮の疼きに抵抗できなくなっていた。牝に犯され、精液を注ぎ込まれる事のみを希求するようになり、それ以外は頭の中が真っ白になって考えられなくなってしまう。自分の汗や吐息までもが少女の肉体を焚きつけ始め、肌は幾度もびくびくと軽く痙攣して快感を露わにしていた。

「ふふふ、蕩けたメス顔晒しちゃって……セックスがしたくてたまらないのね……いいわよ、キャロン。とつても淫乱な貴女のお相手はね、実はもう用意してあるの。貴女もきつと気に入ってくれると思うわ……おいで」

サラが手招きすると、部屋の奥の暗がりからゆっくりと人影が歩いて来る。大柄で背は高く、肩幅は広い。そして赤い瞳が暗闇の中でも輝いていた。やがて座り込んだキャロンの眼前まで歩み寄った男は、青黒い影のような姿をしていた。顔は判然とせず、赤く光る妖しい目と大きく裂けた口だけがあり、股間から生える赤い触手と、大きく逞しいモノが精力に満ちた牡を主張していた。その姿はまるで、往時のラモー・ルーのようであった。

「はあ、はあ、はあ、え、う、嘘……嘘よ。その姿は、まさか、ら、ラモー・ルー……？いえ、そ、そんなはずないわ、貴方はあたしがリバースの剣で倒したはず……まさか、貴方まで蘇ったというの？」

倒したはずの魔王の姿をした魔物の出現に動揺を隠せないキャロン。発情した身体のこととも忘れるほどに驚愕し、起き上がって膝立ちになって男に向かい合う。

「残念ながらこの子は貴女の愛しのご主人様、ラモー・ルーではないわ。彼はね、貴女の子宮の奥で淫呪によって保存されていた彼の精液と貴女自身の卵子を這蛇が吸収し、貴女の胎内で合成された魔族の幼体。そう、この子は貴女がさつき産んだ赤ちゃんよ」

「う、うそ、うそよ、そんな……こ、これが、わたしの……赤ちゃん……」

驚愕するキャロン。自分の産んだ子供が人間でも蛇でもなく魔族であった事も衝撃だったが、その子供がラモー・ルーそっくりの姿をして、しかも既に大人と云っていい身体にまで成長しているという事実は、とても現実だとは思えなかったのだ。

「この子はね、貴女が気絶している間に、貴女が流した愛蜜やおっぱいを啜って大きくなったの。元々魔物の成長は早いんだけど、ここまで育つなんて、よっぽど貴女の体液が魔力に満ちて美味しかったのね。ほら、良くごらんなさい、この逞しさ……ふふふ、すごいでしょう？……コレが今から貴女のアソコを貫いて、膣内を犯し尽くすのよ……」

サラが嗤いながら男のモノに手を治える。長くて太いモノは既に先走りにぬめり、根元の触手は粘液に濡れてゆらゆらと蠢いている。辺りには濃厚な牡の臭いが立ち込め、眼前に晒されたモノを見てしまった少女はもう男のモノから目が離せなくなり、身体を抑える手に力が籠ってしまふ。腕に乗って強調された乳房の先端では乳首が痛いほどに勃起、秘裂から蜜が溢れて太股を伝う。汗が浮かんだ肌からは既に発情香が漂い始めていた。

「ふふふ、濃い発情香が漏れているわよ、キャロン。カラダが疼いて仕方がないのでしよう？乳首をビンビンに勃たせちゃって……アソコもぐつしより濡れて、蜜が太ももに垂れてるじゃない。もうこの子に犯して欲しくて堪らなくなっているのでしょうか？なら、淫魔の蜜奴隷らしくこの子にもきちんとお願いしなさい」

「ああっ……だ、だめ……この、ニオイ、か、身体が……はあ、はあ、う、疼いて……止められない……喉が、乾いて、あ、あそこが、きゅんってなっちゃう……はあ、はあ、もうダメ、カラダが、ほ、欲しがってる……ああ、ちようだい……お願い、貴方の、逞しいモノで、あたしの、淫らなアソコを、貫いて欲しいの……」

逞しい牡のモノを見て、牡の臭いを嗅いでしまった少女の肉体はもう、歯止めを失っていた。瞳は潤んで光を失い、半開きの唇からは甘い吐息が漏れ続け、心臓は痛いほどに高鳴っている。少女は落ちようとする自分を抑えていた腕の力を緩めてその肢体を男に晒し、指で自らの陰唇を開いて秘部を晒しながら誘惑してしまう。

「ふふふ、自分の子供に発情して犯して欲しいって誘惑するなんて、本当の淫魔みたい……いいわよ、キャロン。お望み通りにしてあげる。この子はラモー・ルーの因子を持っているから、きっと満足してもらえるとと思うわ。じゃあ、鏡に記録しながらじっくり見ていてあげるから、思う存分犯されて、イキまくって、蜜と魔力を捧げなさい」

「はあ、はあ、はあ、き、来て……ああっ、そ、その目は……はあ、はあ、はっ、はっ、あああ……胸が、どくんって……あ、こ、これ……か、身体が、痺れて……力が、入らない……ああっ、もう、ダメ……カラダが、燃えちゃう……お、お願い、抱いて……あたしの身体の疼きを、慰めて欲しいの……」

男の目が妖しく光ると、キャロンの身体に残された力が抜け、どこも心地良くなってゆく。その力を少女は身体で覚えていた。ラモー・ルーの目の魔力、それをこの男は受け継いでいるのだ。少女は自分の心に淫らな、背徳の欲びが芽生えるのを感じつつ、力の抜けた足取りでふらふらと男の方へ歩み寄ると、その裸身を胸板へと倒れ込ませてその身を預けてゆく。男は手を差し伸べて抱き寄せ、小柄な少女の肢体を手中へと収めた。

「んうっ……む、んむ、んあ、あう……んんっ、む、んう、はあっ、ん、んう、んんっ、あ、やあっ、あう、はあっ、はあっ、ああっ……キ、キスだけで、こんなに……むうっ、んあ、ああ、はう、ああっ、もう、ダメ、あたし、蕩けちゃう……むんっ、んあ、はあ、あっ、触手が、口の中に、む、んぐ、んぐっ、んんうっ！」

キャロンを正面から抱きしめた男は、片腕で少女を抱いたまま、あごに手を触れて上を向かせると、赤い目を光らせながら少女の顔に迫り、桃色の可憐な唇に口づけをした。そして、少女の唇が抵抗なく開かれると、口腔内に細い触手を何本も挿入して少女の舌を絡め取り、愛撫を始めたのだ。淫獣のような細い肉蛇が幾本も口腔に押し入り、白い歯を、赤い舌を、喉を蹂躪してゆく。

（口の中で触手が動き回って……舌が、犯されてる……うそ、なんで？舌だけなのに、なんでこんなに気持ちいいの？ああ、ダメ、あたし、すごく感じちゃってる……）

触手のディープキスに夢中になってしまい、自ら舌を出し、触手を迎えに行ってしまう少女。どろどろした粘液を纏った触手が舌を包んで揉みしだき、少女の口内が穢し尽くされてゆく。口の中も、口の周りも濃厚な牡の性臭に包まれ、粘液に濡れてひくひく蠢く唇は淫靡な性器のように変えられてしまう。その粘液は淫毒を含んでいたのだが、少女は喉に注がれたそれを何の抵抗なく飲み下してしまう。キャロンは胃の奥がぼうっと熱くなってくるのを感じながら、触手のキスを更にせがむように舌を動かしてしまふ。

「んっ、んう、ん、や、んぷ……んく、んんっ、むん、ぷむう、んっ、は、あうっ！あ  
んっ、んあう、あぷ、はあっ、はあっ、あっ、あたし、キスだけで、イカされちゃう……  
んう、んあ、ああっ、んっ、むんっ、んむっ、んんっ、ううんっ！」

触手によるディープキスに心を奪われてしまい、排卵効果を持つ淫毒の効果も相まって  
昂ってしまった少女の肢体は容易く絶頂に達してしまう。力が抜けてかくかくと震える少  
女の肢を秘部から溢れた蜜が伝ってゆく。ようやく解放された舌は粘液にまみれ、触手と  
の間にねっとりとした唾液が糸を引いて光っていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……お、お願い、もう、キスだけじゃ、我慢できないの……  
触って……その大きな手でおっぱいを揉んで、熱い舌であたしのいやらしい蜜を吸って、  
あたしのカラダを、貴方の熱い触手でめちゃくちゃにして欲しいの……」

性的昂奮によってすっかり紅潮してしまった顔を晒し、キャロンが男に懇願する。口元  
からは触手の粘液が零れ、目元はすっかり潤んでいる。淫欲に蕩けたその目で、男の赤い  
瞳を真つすぐ見つめ、自ら凌辱を求める少女。ラモー・ルーに処女を奪われて以来、愛液  
と精液にまみれ、牝の悦びを芯まで植え付けられて淫蕩に堕ちた彼女の肉体は、闇の淫呪  
が完成して淫紋となる過程で淫魔の肉体へと作り替えられた。少女はとうの昔に性欲に逆  
らえない身体になっていたのだ。男は少女の願いを聞き、石畳の上へ押し倒すとその瑞々  
しい肌へ手を触れ、覆い被さってゆく。

「ああっ……き、来て……はあ、はあ、ああんっ、うんっ、く、んっ、あ、そこ、は、  
ああっ、んあ、やああんっ、はあ、はあ、触って……ううっ、ああっ、もつと、はあ、は  
あ、気持ち、いい、やあんっ、うんっ、んっ、く……そこ、感じちゃう、ああっ、あっ、  
やあっ、はあ、はあ、はあんっ、ああっ！ん、んうっ、あ、いやあんっ！」

ディメルンの森の奥、忘れられた神殿の広間に少女の蕩けた喘ぎ声が響いている。ラモ  
ー・ルーの因子を持つ魔族の男が、その母親を愛撫しているのだ。男の手が少女の豊かな  
乳房を巧みに揉みしだき、粘液に濡れた触手の舌が耳朶と首筋を同時に舐める。少女の柔  
らかで敏感な肌が男の淫らな舌と冷たい手に侵されるたび、少女は甘く蕩けた吐息を漏ら  
し、嗜虐心を煽る喘ぎを零し、その身を淫らにくねらせ、背や足を痙攣させて悶える。

「ああっ！こ、これ以上、されたら、あああっ、あ、や、ああっ！だ、だめっ！い、イ  
ク、んっ、んあっ、ううっ！はあ、はあ、うん、んうっ、く、ああん、い、いいの、あっ！  
や、あ、もうイっちゃう、いやっ、ああっ、くうっ、ああっ、はっ、んううーっ！」



男の手や舌の感触や臭いはどこかラモー・ルーを思い出させる所があり、男の愛撫は少女の敏感な所を知り尽くしているかのようだった。未だにラモー・ルーの凌辱を忘れられない少女の身体はあつという間に愛撫の虜となつて快樂の淵へ追い込まれてしまう。キャロンは男の手によってぐにぐにと揉まれていた豊かな乳房を突き出すように反らせ、あごを跳ね上げ、高い嬌声をあげて絶頂に達してしまう。

「はあ、はあ、はあ、いや、お、おねがい、今、いったばかりで敏感に……あぁっ！だ、ダメ、ううっ、ん、んくうっ、あ、あああ、お、乳首、吸っちゃ、はううっ、ああ、あ、あくうっ、ダメ、はぁんっ、あつ、あぁあっ！え、う、嘘、おっぱい、飲まれてる？」

男はキャロンが幾度果てようとも触手と舌と指での愛撫を止めることはなく、少女の発掘され尽くした性感帯を余さず捉えてゆく。やがて、男の口が彼女の最新の性感帯である乳腺への刺激を始める。乳首を口に含み、乳房を優しく揉みながら触手の舌で乳首をこりこりと甘噛みし、乳首を捏ねながら舌で乳腺孔を探り当てると、細い触手を刺し入れて孔を優しく掘り起こす。すると、出産したばかりで膨らんでいる少女の乳房は甘く濃厚な母乳を男の口内へと噴出させた。それは愛撫という歪な形ではあるが、少女にとって初めての授乳体験に他ならなかった。

「そういえば、その子はまだ産まれたばかりで、まだまだ魔力が足りていないのよね。貴女はママなんだから、ママらしくそのいやらしく育ったおっぱいでリバースの魔力が籠ったミルクをたくさん飲ませてあげるといいわ」

「あつ、す、吸われてる、あたしのミルク、飲まれちゃってる……いやあつ、あつ、はあ、はあ、え、か、カラダが……こんなの、はうっ、い、嫌なのに、はぁんっ、どうして？あ、あたし、感じてる……あぁあつ、ダメ、気持ちいい……んくっ、う、あふうっ、どうして？もつと飲んで欲しいって、思っちゃう……あつ、はあ、はあ、はぁんっ」

サラの声を遠くに聞きながら、キャロンは喘ぎ続ける。母乳を飲まれるという初めての感覚、男が乳首を吸い上げる力強さ、サラに見られているという羞恥、そして何より授乳行為によって快樂を覚えてしまっているという背徳に少女の体と心は蝕まれてゆく。そして、少女は母乳經由でリバースの魔力を吸収されており、それを取り込んだ男の魔力は更に強くなつてゆく。至高の蜜を持つと評された少女の体液を取り込むことで、男は徐々にラモー・ルーの子に相応しい力に近づいてゆくのだ。そうと知る由もないキャロンは、授乳愛撫による快樂の中で絶頂に追いやられてしまう。

「お、お願い、こ、こっちも、吸って……はううっ、あつ、あああつ、しよ、触手ではあ、はあ、ああつ、やつ、乳首、す、吸われてる、あううっ、あつ、はああつ……すごく、イイっ！はあ、はあ、あ、あたし、おっぱい飲まれて、イカされちゃう、ああつ、ダメ、あたし、もう、はあ、はあ、戻れなく、なっちゃう、あぐっ、んううっ！」

男に吸われていない方の乳房には触手が巻き付き、吸盤型の先端が乳首に取り付いて蠕動し、細い触手で乳首を捏ねながら牛乳を搾るように母乳を吸い上げてゆく。リバースの魔力を帯びた濃厚な母乳を男に吸われ続け、快楽を伴う母乳の噴出によって少女は幾度となく絶頂してしまう。辺りには母乳の甘い匂いと、少女の発情臭が充満し、それを間近で吸い続ける少女の思考は徐々にピンク色の靄がかかって理性を放棄し始めてしまう。

「あああんっ、おっぱい、もつと飲んでえっ！ああ、いいの、すごく気持ちいいのっ、あう、うくうっ、はあ、はあ、あううっ！ああ、おっぱい、すごく感じちゃう！こんなの、初めてっ、あたし、おっぱい飲まれて、幸せになっちゃう！あぐ、んううっ、ふう、ふう、ふくうんっ、ああっ、乳首、溶けちゃうっ！はあ、はあ、あ、あああっ！」

乳房を絞るように揉みしだき、乳首を咥えこんで痛いほどの強さで母乳を吸い続ける男の頭を思わず抱きしめながら、キャロンは絶頂の悦楽と同時に心が蕩けるような多幸感を味わっていた。それは本来、母が子に感じる愛情、あるいは母性と表現されるべき物だったのだろう。しかし、少女が今母乳を飲ませている男は我が子ではあるが憎むべき敵、夜の国の魔族である。男は体液という形で少女の持つ無尽蔵の魔力を奪い続け、少女は至高の快楽を与えられてどこまでも落ち続けるのだ。

「はあ、はあ、あああっ！おっぱい、イっちゃう！あう、んっ、んくうっ！うっ、ううっ、うんっ、んううっ、んはあっ！止まらないの、あつ、あつ、はああっ！おかしく、なっちゃう！ひあつ、おっ、は、はう、ふう、ふう、ふくうんっ！もう、ダメえっ、はあ、はんっ、あつ、んあつ、だ、だめっ、また、イツ、くうっ！うっ、んううっ！」

初めてラモー・ルーに触られてから三年余り、数え切れないほどの牡に揉まれて淫靡に実った乳果を自分が産んでしまった子である魔族の男に貪らせ、母乳を吸われながら少女は何度も背を反らして絶頂を迎える。そのたびにたわわな乳房は男の顔に押し当てられてひしゃげ、豊かな弾力を収穫者に堪能させてしまう。そうして、少女が幾度目かの絶頂を迎えると、男はようやく満足したのか乳首から口を離し、もう片方の乳首も触手が解放して母乳の吸引を終えた。執拗に吸い続けられて膨らみ、充血によって赤らんだ乳首からは、飲み残した母乳が零れて乳房を濡らしていた。

「はあ、はあ、はあ……あ、はあっ、は、んう、あ、やあっ、まだ、いったばかり……んうっ、あ、やめて、んはあっ、あんっ、ふうんっ、ああ、ダメ、まだカラダが熱い、はあ、はあ……はあ、はあ、あっ、はう、ううん、あああ、まだアソコがじんじんって疼いてる……あたし、もつとエッチして欲しいって思っっちゃう……」

男の熱い舌とぬめった触手が少女の汗に濡れた瑞々しい肌をゆっくりと犯しながら這い降りてゆく。少女はその丹念な愛撫に甘く蕩けた吐息を漏らし、切なげに喘ぎ、快楽に悶えながら、無意識に性感帯へ触れやすいようにと動いてしまう。やがてうつぶせになり、膝を立て、腰を浮かせ、肢を開き、お尻を男の眼前へと突き出してしまう。少女の秘部は男が辿り着くのを待ち望むかのようにひくひくと痙攣して蠢き、溢れ出した濃密な愛蜜はむちっとした太ももにまで垂れ、辺りを淫猥に濡らしていた。

「お、お願い……はああっ……ああ、あん、あ、はあっ、あ、そこ、いい……ああっ、すごい、はあ、はあっ……はあ、はあ、舌が、いっぱい……はあ、ああ、熱い、ああんっ、ああ、感じちゃう、はあ、はあ、アソコも、お尻も、触手に舐められてる、ああ、あ、はあっ、ふあ、く、ふうんっ、はあ、はあ、蜜、いっぱい吸われちゃう……」

眼前に突き出された白桃のような少女の尻肉に男が手をかけると、溢れた愛蜜によって濃厚な牝の臭いを漂わせている秘裂へと顔を寄せてゆく。すると、尻肉を掴んだ男の手が溶けて無数の細い触手となり、伸ばされた男の舌も分裂して無数の細い触手になった。そして、熟した果実のように蜜が滴る少女の媚肉へ思い思いに取り付き、蛇のように這い回り、縦横無尽に舐めまわし、愛撫を開始してゆく。

「あ、んう、つく、ううんっ、ああ、んくっ、あ、んやあっ、これ、んう、ああんっ、はあ、は、まつて、もう、はああんっ、だ、だめ、そこ、そんなにされたら、すぐイっちゃう……あああ、あ、あっ、う、んっ、いやあんっ、そこ、だめえっ……ああ、うっ、んうっ、ああんっ！もうイク、イっちゃううっ！あああっ！」

少女の豊かに膨らんだ尻肉から、むちっとした太ももに至るまで、男の赤黒い肉色の細い触手が幾本も取り付き、縦横に舐め擦っている。その様は、まるで無数の細い蛇が這い回っているようだった。尻たぶを揉み、尻穴をつつき、会陰を撫で、尿道口を舐め、太ももを擦り、大陰唇を捲り、包皮を剥き、花芯に巻き付き、小陰唇をなぞり、膣口を潜ってGスポットを刺激する。それらはすべて同時に行われるのだ。性感帯が一番集中している箇所への総攻撃に少女は為す術もなく、何度も首を振ってポニーテールを振り乱し、乳房を床に擦りつけながら幾度もあごを跳ね上げ、腰を蠢かせ、悲鳴のような嬌声をあげて喘ぎ、潮を吹きながらの絶頂に追いやられ続けた。

「やつ、はう、ん、あふ、んんっ、はあ、はあ、ふああ、すごく、感じちゃう、あんっ、やつ、あ、ひやつ、はああ、み、蜜、吸われて、るうっ、ダメ、こんな、ふあっ、はあっ、あっ、な、ナカ、舐められると、おっ、ち、力が抜けて……ひあっ、う、あうっ、んああっ、蜜、吸われて、気持ち良くなっちゃうの……あ、ああっ、ふあ、んっ！」

男は少女の肢体を快楽の檻に捕らえ、魂まで淫蕩に染め上げるように責め続けてゆく。尻穴も、尿道口も、膣口も、股間に存在する穴は細い触手が幾本も集って寛げ、穴の内側にも潜って襞の隅々までを舐めまわしている。少女はその蠢きのひとつひとつに反応して肌を震わせ、甘く蕩けた吐息を漏らしてここを触って欲しいと無意識にねだってしまう。触手はそれに応えるように股間に存在する少女の性感帯をひとつひとつ入念に愛撫して覚醒させてゆく。更に、触手は這い回りながら溢れた愛蜜や汗などの体液を啜って魔力を吸い上げ、男の魔力に変えてゆくのだ。

「あふ、んあ、ああん、ひうっ、んっ、んく、あう、はあ、はあ、ああ、うっ、あぐっ、あああ、はあっ、カラダが、熱くて、おかしくなるうっ……あああ、いっぱい熱い舌に、あっ、アソコ、舐められて……ああ、蜜、吸われてる、はあ、はあ、ああ、蕩けちゃう、あ、あたし、触手に蜜、吸われて、すごく感じちゃうのおっ！」

更に男の股間から伸びて来た触手たちが突き出された少女の腰辺りまで伸びてくると、先端から白濁した粘液を分泌し、魔性の快感によって腰が蠢くことでふるふると揺れている尻肉へと垂らしてゆく。そして、粘液を浴びた無数の細い触手たちが一斉に蠢き出し、少女のお尻から股間へ、そして肌へと粘液が擦りつけられ、ローションのように徐々に塗り広げられてゆく。

「ん、んんっ、はあ、はあ、あ、気持ちいい……え、あ、こ、この臭い……はあ、はあ、あ、やあ、つう、これ、せ、精液、はああっ、ダメ、お、奥が、疼く、ううっ、あ、はあっ、も、もつと、やあ、あんっ、あ、んんっ、あっ、あああっ、ふ、んっ、あ、んああっ！」

少女は自分の肌に粘液を塗られている事に気づき、その臭いから粘液の正体に思い当たってしまう。その粘液……精液の臭いを少女は今までの経験から本意ながらも良く知っていたのだ。そう、触手は自身の精液を少女の身体に垂らし、細い触手でマッサージしながら擦りつけていたのだ。その行為はまるで、この牝は自分の所有物であると主張するかのようであり、精液を全身に塗り込め、少女の身体と記憶に臭いを染み込ませて逃れられなくしようとしているのだ。

「あつ、あ、んっ、んんっ、あう、ふ、うっ、は、んあ、んんっ、こ、この臭い、だめ、あ、ああっ、は、ダメ、こんな、あ、ひあつ、触手が、ぬるぬるして、んんっ、ふ、これ、感じちゃう、ううっ、ダメっ、こんなの、耐えられないっ、ああっ、イっちゃう、いいっ、んんっ、イっ、く、うううっ！ふっ、んうううっ！」

乳房も、腋も、太ももも、お尻も、股間も、生暖かい触手の精液を隅々まで塗られてぬるぬるになり、肌の至る所が粘液の鈍い照りを帯びている。触手はなおも蠢き続けてぬめた肌を犯し、尻穴に、尿道口に、膣口に精液を揉み込んでいる。既に臭いが肌に染み込んで取れなくなってしまう程の量を塗られているが、それでも触手たちは重ねて精液を擦り込んでゆく。しかもこの精液はラモー・ルーのそれと同じく催淫効果を持っている。その臭いを嗅ぐだけでも少女には観面の効果を生んでしまうのだ。

「もう、止めてえ、せーえき、擦りつけないで……臭いが染みついて、取れなくなっちゃう、あああ、これ、ダメ……この臭い、嗅いでると、あたし、おかしくなっちゃう……触手の、ぬるぬるが、はあ、はあ、まるで、ラモー・ルーに、舐められているみたい……ああ、お、思い出したら、あつ、子宮の奥が、もつと、きゅんきゅんって疼いて……だめ、ああ、もつと触って欲しいって、思っちゃう、はあ、はあ、ああ……」

獣の牡が自分のモノにした牝にマーキングを施すかのような行為に、キャロンは背筋がぞくぞくするような被虐的な昂奮を覚えてしまう。更に自分の全身から漂う濃厚な牡の臭いに発情した子宮は激しく疼き、ぬるぬるとした無数の極細触手による全身愛撫によって、ラモー・ルーに受けた初めての触手凌辱を思い出してしまった少女の心は淫蕩に傾き、熱く湿った甘い吐息を漏らしながら何度も果ててしまう。男の愛撫で幾度も絶頂に至った少女の肢体はすっかりこなれて淫魔の発情を受け入れてしまい、下腹部で精液まみれになっている淫紋が淡い魔力光を帯び始めていた。

「あああ、だめ、ふう、ふうっ、んっ、あんっ、うあ、それ、ああっ！そ、そこ、押される、んうっ！ダメ、んっ、イっちゃう、あああっ！はあ、はあ、はあっ、いやあっ、も、もうダメ、また、イカされちゃう、はあっ、うっ、くふうんっ、あっ、くう、ふ、うっ、あああっ！イク、イクっ、イっちゃううっ！ああっ、あああっ！」

男の執拗な触手愛撫によってキャロンの頬は昂奮ですっかり紅潮し、欲情に蕩けた顔を晒してしまっている。肢体を襲う強い快感に幾度も痙攣しては涙を零し、喘ぎ続けた口の端からは涎が滴って床を濡らしていた。子宮から湧き上がる熱に煽られて火照った肌には発情香を含んだ淡い湯気が立ち昇り、汗と粘液に濡れて淫靡な輝きを帯びている。

「んっ、く、ああっ、はあ、はあ、はあんっ、ふう、ううんっ、あ、あんっ、あ、ひいんっ、い、入り口、いじられると、あたま、真っ白になっちゃう、はあ、はあ、あううっ！ん、ぐ、あああっ！ダメ、イクの、止まんない……はあ、はあ、はあんっ！」

キャロンの尻穴と膣口には穴を覆い尽くさんばかりの極細触手が密集し、精液と愛液の混合したローションを使って肉壁を揉み込み、壁の内側にも入り込んで穴を寛げようとしている。アヌスの擦られるような感覚、大陰唇を揉まれる感覚、小陰唇を上げられる感覚、膣口の内側を舐められる感覚、それらが同時に少女の敏感な肢体を襲うのだ。外側だけでなく内側から来る快感に少女はあごを跳ね上げて感じ入ってしまう。

「ああっ、はあ、はあ、う、んっ、ふっ、う、んああっ、ほ、細い触手が、ナカに、入って、来る、ああっ、奥まで来ちゃう、ダメ、ああ、うんっ、く、ふあっ、はあ、はくうんっ、んう、あああ、気持ち、いいっ、あたし、もう、ダメ、堕ちちやいそう……！」

極細の触手が少女の膣内を愛撫しながら奥へと進んでゆく。いつも極太のモノで一気に押し潰されている膣壁だが、このある意味優しい愛撫によって愛液の分泌を加速させ、奥へ奥へと触手を誘ってしまう。そうして、あつという間に触手たちは少女の子宮口まで辿り着き、ポルチオに責めかかり、子宮口を寛げにかかる。

「あああ、はあ、は、あうっ、うつく、んはあっ、ああ、いちばん奥、やつ、舐めちゃ、いやあっ、ああ、ダメ、子宮降りちゃう、あはあっ、い、ああっ、くる、来ちゃう！」

極細触手の繊細な愛撫に翻弄されるままにはしたなく喘ぎ、悶える少女。ラモー・ルーによって植え付けられた種は少女の胎内で芽吹き、愛液と精液にまみれ続けたその肢体は今宵、遂に淫紋という淫蕩の花を咲かせてしまった。少女は子宮の奥底で熾り続ける淫らな欲望の炎にその身を委ね、淫欲の虜になってしまう。

「あっ、あっ、ああっ！ひああっ！はっ、はっ、んうっ、あ、ひいんっ、んんっ、ああ、ひいんっ、はあ、はあ、あっ、ふああっ！あっ、おっ、ああ、奥でイク、イっちゃう、あううっ！イク、イクうっ！……はあ、はあ、はあ、あああ、ダメ、足りない、これじゃまだいき足りないの……欲しい、あたしを、めちやくちやに犯して欲しいのおっ！」

膣内の性感帯を極細の触手で愛撫され、幾度となく絶頂に果てたキャロン。しかし、淫紋の活性化によって淫魔と同等の肢体を持ち、色欲を植え付けられて淫蕩に堕ちてしまった彼女にとっては前戯に過ぎず、物足りない子宮の疼きが訴えてしまう。そして、彼女の心はもう、その欲求に抗うことが出来なかったのだ。

「ああああ、身体が熱いの……子宮が疼いて……も、もう、我慢できないのっ、お、お願い、来てえっ……ここに、入れてちょうだい……貴方の一番太いモノで、あたしのカラダを貫いて、お腹の中を触手で抉って、子宮を精液で犯して欲しいの！」

イカされ続け、そのたびに強くなり続ける体の飢え、淫魔の本能に耐え切れず、キャロンは自分が産んだその男に挿入を懇願した。上半身を起こして四つん這いになると、愛蜜と潮に濡れ、触手に愛撫され続けている陰唇を自分の指で拵げつつ、欲情に潤んだ翡翠色の瞳で男を見る。男の顔に表情はなく、様子を伺うことは出来なかったが、その瞳が赤く光って淫紋がずくん、と疼くと、少女はそれを了承と認識し、蕩けた笑みを浮かべた。

「はあ、はあ、あぁっ、お願いっ……精液、欲しいの……貴方のモノで、あたしの子宮口にキスして、子宮を埋め尽くす位、いっぱい射精して欲しいのっ！あぁっ、あたしのアソコ、燃えちやいそう……お願い、貴方の逞しいモノで、あたしをイかせてえっ！」

男は極細触手を戻し、キャロンの尻肉をわし掴みにする。そして、先走りにぬめる赤黒い怒張を、触手の愛撫によってぐっしりと濡れて蕩けきった膣口へ浴える。それだけの接触でも、少女はぞくぞくと背筋を走る快感に震え、甘い声を漏らしてしまう。

「あ、あんっ……はあ、はあ……お、お願い、もう、ガマンできない……一番奥まで、貫いて、子宮口を叩いてちょうだい……もう、焦らしちゃ、嫌……あぁっ」

男に掴まれた少女の尻肉がぐにと撓み、太く、ごっごつした亀頭が蜜に濡れてひくひくと蠢く桜色の陰唇を掻き分け、膣口へ沈められる。触手によって念入りに解された小陰唇と膣口は濃厚な愛蜜にぬめって亀頭を容易く受け入れ、柔らかくて熱い膣内の柔肉が挿入を待ち望んでいたかのように包み込み、奥へ奥へと呑み込んでゆく。

「はあ、あ、あぁんっ！入って、来る、うっ……ふ、太い、うぁっ、き、来て……」

男の剛直が少女の秘裂を掻き分け、膣内へと沈められてゆく。小柄なキャロンの膣道は狭く、愛蜜を纏った無数の肉襞が触手のように柔らかく絡みついてモノを握り締め、根元から扱き、締め付けつつ絞り上げる。そして膣奥にはここを突いて欲しいと言わんばかりの極上の媚肉が待ち構えており、辿り着いた亀頭を包み込んで吸い付き、精液を奪い取るまで離そうとしない。これがラモー・ルーの淫呪と、数多の牡たちによって育て上げられた少女の蜜壺である。挿入した牡に極上の快楽を与え、否応なく精を奪い去る天上の名器であるが故に、彼女を犯そうとする者が増え続ける理由の一つでもあった。

「あぐっ！ううっ、ん、ぐうっ、ああ、ああっ！んうっ！はあ、はあ、ふ、太くて、熱いつ！ああっ！すごいっ、これ、これが欲しかったの！お、奥まで届いて、ダメ、ああっ、ナカ、挟られて、広がって、あつ、んはあつ、これ、すごいイイっ！お願い、もつと奥まで、突いて、突いてえっ、はあ、ああっ！はあ、はっ、あぐうっ！うっ、くうっ！」

ぐちゅり、と淫靡な飛沫音を立てて男のモノが根元まで突き入れられる。キャロンの狭い膣道が太い陰茎によって蹂躪され、亀頭が柔らかな肉壁を踏み荒らしながらポルチオまで到達する。待ち望み、焦らされた末の挿入で最奥まで貫かれ、征服された少女の体は歓喜に爆発した。無理やり開かされ、繰り返し凌辱され、夜の魔力に穢され、淫紋を刻まれて淫蕩に堕ちた体が色欲を受け入れ、一斉に歓喜の声を上げたのだ。

「ああんっ……入れられただけで、イっちゃった……お、奥まで、いっぱい……お腹の中でどくどくって脈打って……はあつ、ああつ、すごく、気持ち、いいっ、ねえ、もつと、激しくして、あたしのナカ、いっぱい挟って、奥叩いてえっ、んうううっ！あああ、すごい、いいっ、あ、ああっ！はあ、はあ、はあ、はううっ！んっく、んああっ！」

膣内を埋め尽くすモノの熱さに震え、嬌声をあげるキャロン。淫紋による発情で飢えきった体を満たされ、少女は心から悦楽を享受していた。ぜえぜえと喘ぎながらあられもなぐ快樂と絶頂を訴え、肉欲に飲まれてなお求め続ける嬌態は既に少女のものとは呼べなかった。それは性に爛れた淫乱な娼婦の姿であり、発情という本能に敗北した牝淫魔の姿であり、魔王の愛妾として契約の烙印を押された蜜奴隷の痴態であった。

「あああつ、ぞくぞくって、来ちゃう、だめ、あたし、気持ち良すぎて、すぐイっちゃいそう……はあ、はあ、はあつ、うっ、んぐ、んうっ、はあ、はあ、あううっ！あつ、あつ、やあつ、触手も、来て、やあつ、ああつ、はあ、はあ、んうっ、ああ、すごい、あたし、すごく感じちやう！ううっ、んあつ、はあつ、ああんっ！」

モノがキャロンの最奥を叩いた事を確認すると、男がゆっくりと注挿を開始する。愛蜜にまみれたモノを膣口付近まで抜くと少女の背筋にぞくぞくとしたものが走り、再び奥まで突き入れると、ずちゅ、という水音と共に少女の膣道の肉壁が蹂躪され、ポルチオを叩くと高い喘ぎ声が漏れる。男は熱く滾るモノで少女の膣内を凌辱すると同時に、陰毛の代わりに生えている触手を伸ばしてゆく。触手は乳房に巻き付き、乳首を弄り、尻肉を撫で、アヌスを潜り、Gスポットを抉り、太ももを舐め、花芯に吸い付く。その状態で注挿されると、振動が触手に伝わり、全身を同時に愛撫されている状態になってしまう。



「あつ、あつ、あつ、あつ、はあつ、あう、んうっ、く、ううん、ふう、ふう、うっ、うっ、くっ、くふうっ、うあ、ああんっ、はあ、はあ、ううっ！あつ、あ、はあ、う、んうっ、ああつ、んく、うっ、うっ、あんっ、んああつ、はあ、はあ、はあんっ！」

怒張したモノを突き込まれるたびに釣鐘のような少女のたわわな乳房は揺れ動き、丸く膨らんだ尻肉は男の固い腰に叩かれて撓み、たん、たん、ぱん、ぱん、という軽い音と、ぐちゅん、ずちゅっ、じゅぶっ、という淫猥な水音を同時に立てる。そして全身に取り付いた触手は後背位による振動をも利用して少女の柔肌を愛撫する。男の徐々に早くなってゆく注挿に合わせて少女の頭も揺さぶられて強すぎる快感と相まって意識が朦朧となり、細い喉からは突かれるたびに肺の空気が漏れて断続的な喘ぎ声が溢れ続ける。

「あつ、あつ、あんっ、ああ、はあ、はあ、ナカが、いっばいで、お、お腹の奥、何度も叩かれて、あううっ！はあ、はあ、ああ、ダメ、来ちゃう、もつと、もつと突いて、激しく、抉って、ううっ、く、んはあつ、あああ、つく、あぐ、うああっ！」

愛蜜の沼のようになった少女の内側は火のように熱くなり、とめどなく愛蜜が溢れ続けている。少女は体の中を幾度も走り抜ける狂おしい歓びを感じていた。快感に腕の力が抜けて肘で上体を支える格好になっても、少女は俯いてはかぶりを振り、背をぐっつと反らし、あごを跳ね上げ、切ない溜息を漏らし、激しく喘ぎ、呻き、嬌声をあげ続ける。

「あああつ！え、これ、あううっ！な、中で、動いて……これは？あううっ！ああつ、す、吸われてる、あああ、これ、だめ、ああつ、ナカで、暴れないでえっ、ううっ、あぐ、んううっ！触手に蜜、吸われてるっ、はあ、はあ、ああ、だめ、あたし、蜜吸われて、感じちゃうっ！はあ、はあ、あううっ！ん、くっ、んああつ！」

キヤロンは自分の膣内を蹂躪している男のモノが膨らみ、そこから別の蠢きが生まれたことに気付かされる。それは幾本もの細い触手だった。触手は膣口や子宮口で蠢き始め、少女の膣内に溢れる愛蜜を吸おうと狭い膣道の壁に絡みついたのだ。それと同時に男の股間から生えた触手の何本かが、溢れた愛蜜を啜りながら少女の下腹部に取り付き、妖しく灯っている赤い淫紋に触れると、そこへ魔力を流し始める。

「はあ、はあ、え？うあつ、あつ、ああんっ！お、お腹が、熱いつ！何、これっ、ああっ、だめ、子宮が疼いて、ううっ！だ、だめ、ああつ、い、淫紋、熱くなつて、これ、魔力？あつ、だめ、カラダが、おかしく、なるうっ！はあ、はあ、あぐうっ！ああ、許して、うっ、んううっ！はああつ、あ、あたし、もうイク、イカされちゃううっ！」

触手が淫紋に流しているのは闇の魔力である。サラがしたように、淫紋に触れて直接魔力を流すと、淫紋は活性化してその持ち主である肉体は強制的に発情してしまうのだが、活性化した淫紋は性感帯の一つでもある。淫紋は魔力を注ぐことが刺激となって花芯と同等の快感を生み、淫紋と魔力的に繋がっている子宮も堪えきれない程に疼いてしまうのだ。

「はあ、はあ、はあっ、いいの、気持ちいいのっ！ああっ！あたしっ、闇の魔力、カラダに流されてるのっ！どうして？きもちすぎて、おかしくなっちゃうっ！はあ、はあ、魔力吸われて、淫紋に、流し込まれてっ、ふうっ、ふうっ、ああ、だめ、こんな、すごい、あたし、耐えられないっ！あぐ、んはあっ、ああっ！体中が、びくびくして、悦んじやうのおっ！イっちゃやう、あたしもう、イっちゃやうよおっ！ああああーっ！」

初めて体験する淫紋への愛撫に戸惑いながらも、髪を振り乱し、嬌声をあげて悶えるキヤロン。今、少女を襲っているのは今までの愛撫や凌辱でのそれとは違う、初体験の快楽だった。少女の体の奥底からとどなく生まれるリバースの力が、触手によって蜜とともに啜り出され、それを男が闇の魔力に変換し、淫紋に触れている触手が少女の肉体へ送り込む。陰陽両方の魔力が混ざりながら少女の肉体の中で循環し、そこで生まれる熱が快感として肉体に蓄積されてゆく。二人の体が繋がったことで可能となる、魔力の円環による愛撫であり、究極の快感を生む凌辱であった。

「ああっ！あ、熱いの、体が熱くてたまらないの！あううっ！あっ、子宮、押されて、ナカ、挟られて、闇の魔力、流し込まれて、あああっ！くるし、うっ、ぐ、ううっ！はあ、はあ、ああっ！ああ、ダメ、ま、またイク、あたしイっちゃうっ！ああっ！はあ、はあ、はあっ！ああイク、イクっ！ああっ、はあっ、ううっ、イクうっ、んううっ！」

あられもなく嬌声をあげ、快感を露わにして悦楽に耽るキヤロン。彼女は既に自分の膣道を踏み荒らし、最奥を幾度も叩く男のモノの感覚に全身を支配され、絶え間なく襲ってくる快楽と幸福、そして絶頂感に陥落してしまっていた。闇の魔力を注がれた淫紋は妖しい光を帯び、芳醇な蜜を蓄えた肢体を淫欲で染めてゆく。淫紋を刻まれ、蜜と共に魔力を吸われたことによって少女の力の源であるリバースの力は陰り、既に夜の国の魔力に抗えなくなってしまうのだ。

「はあ、ああ、ああっ、な、中でうねって、ああっ！蜜、吸われてるうっ！ああっ、はあ、はあ、おなかが、すごく熱くなつて、ううっ！あっ、はあんっ、だめ、これ、すごい、ああ、はあ、はあ、溶けちゃう…：あううっ、んっ、ふう、ふうっ、ううんっ！ああっ、頭、真っ白になっちゃうっ、ああっ、もうダメ、あたし、もうダメえっ！」

体の中で混ざりながら渦を巻く光と闇の魔力の循環が途方もない快楽となってキャロンを何度も絶頂へと導いてゆく。まるで身体の全てを性器のように扱かれているかのような、生と死を交互に与えられているかのような、人間同士ではありえない、この世ならざる交わり。自分の子であり、ラモー・ルーの子でもある魔族の男とのセックスに少女は満たされながら奪われ、支配されながら解放されるオーガズムの極地を味あわされてしまう。

「ああっ、や、はあっ、あっ、あたし、もう、ああっ、はあ、はあ、はあ、あぐうっ！んっ、あっ、あっ、うあっ、は、激しっ、はあ、はあ、つあ、ふうっ、ん、んんっ！ああっ、あたし、戻れなくっ、なっちやう、ん、あう、はあ、はあ、はあっ！ああ、はあんっ！」

モノを馴染ませるようだった男のピストンが徐々に速く、強く、乱暴になり、少女の内側を犯し始める。力強いモノに膣内を抉られながら同時に触手凌辱を受けているキャロンは絶頂に果てる度に意識が何度も明滅し、悦楽の暴風の中で木の葉のように吹き飛ばされ、くるくると舞い続けるほかにない。彼女の心は無限に循環する魔力の奔流が生む極上の快楽の渦に呑まれ、完全に押し流されてしまっていた。

「んっ、う、はっ、ひう、あ、ふ、んっ、はう、うあ、あっ、んぐっ、んんっ、んうっ、あっ、んあっ、あうっ、あ、あ！んっ、や、深いっ、あくっ、いつ、ああ、ううっ、ふうっ、くっ、ああっ、んっ、うくっ、ふう、んうっ！ふああっ、あっ、ああっ！」

犯され続けているキャロンの胎の奥底からは絶えず熱が湧き上がって全身を満たしている。豊満で艶やかに熟した、そして敏感で快楽に一際弱い彼女の肢体は隅々までがラモー・ルーに育て上げられた極上の淫果である。繰り返される凌辱によって数多の性感帯が開発され、肉体の芯に至るまで全てが淫らに染め抜かれてしまっているのだ。

「あああっ！うっ、うっ、んっ、う、ううっ、く、んうんっ、あ、ああんっ、魔力が、おなかで渦を巻いて……ああ、いやあっ、あうんっ、ああっ、はあ、はあ、はうっ、うっ、く、んうっ、ああっ、あたし、燃え尽きちやう……はあ、はあ、あっ、ああんっ！」

男の欲望を叩き付けるような激しいピストンに少女の尻肉は赤く腫れ始め、触手を巻き込んだモノの挿入によって膣内は容赦なく抉られる。キャロンは男のモノが最奥を叩くたびに蕩けた吐息を漏らし、悲鳴のような嬌声を上げ続ける。彼女の内側から沸き起こり、彼女自身を苛んでいる熱、その正体は悦びであった。ラモー・ルーによって暴かれた少女の牝としての本質はマゾであり、少女の肉体は牝に支配され、犯され、凌辱されることで悦びを覚え、快楽を貪ってしまうのだ。

「んああっ！うあ、ふっ、く、触手に、お、お腹の中、掻き回されて、るうっ、うっ、あ、んっ、んうっ、あ、うああっ、ふあ、あっ、あ、ああっ、すごい、はげしっ、あうっ、ひう、うっく、あんっ、はあ、はあ、あ、あたし、もう、お、堕ちちゃう、あはあっ！」

快楽に蕩けた少女は肘をついた体勢で上体を支えていたが、それでも支えきれずに崩れ、今は胸を床に預けて手は空を掴み、尻だけを高く突き上げる格好になってしまっていた。体勢が変わったことでモノが突き入れられる角度が変わり、新たな刺激に少女の腰がひくひくと震え、蹂躪されている陰唇からぷしゃあっ、と透明な潮が噴出する。

「あぐ、ううっ、ああっ、すごい、お腹、挟られて、うぐっ、ああっ、だめ、子宮のままで、触手が、うああっ、あっ、はあ、はあ、そんなに、されたら、ああっ、ううっ、うっく、んああっ！もうダメ、イっちゃう、イっちゃうよおっ！ああっ、イク、んああっ！」

キャロンから吸収したリバースの魔力を得て、魔族の男の周囲に顕在する魔力は更に増し、少女の肢体を覆い尽くす程に成長している。少女は今、触手という鎖に繋がれ、そして魔力の檻に囚われてしまっていた。これは小規模な結界であり、領域内にいる者を捕え、従える力がある。そして男の魔力に打ち勝たなければこの檻から逃れることは出来ない。しかし力を奪われ、快楽に蕩けさせられてしまっている今のキャロンは男の魔力に打ち勝つことは出来ず、思うままになってしまっただ。

「んっ、あっ、あんっ、あうっ、またっ、きちやうっ、ん、うっ、あっ、あっ、あうっ、はあんっ、だめっ、イクっ、あっ、あああっ！あっ、触手、きて、触って、舐めて、ああんっ、気持ちいい、うっく、あううっ、すごく、いいっ、からだが、ぞくぞくしちゃう、ああっ、はあ、はあ、もっど、もっど……はあっ、あっ、ああっ、はあんっ！」

男の魔力の影響によって二人の周囲の石畳が、触手の集合した軟体の床へと変化する。そして床から伸びた触手がキャロンの足に巻き付き、腕に絡み、乳房に取り付いて汗を舐め取りながら愛撫を始める。男の魔力に包まれながら触手に愛撫され、少女は時折催眠術に堕ちていた時のようにうっとりとした表情を浮かべ、男の魔力による支配を受け入れてしまうようになっていた。

「はあ、はあ、はあ、ああっ、やっ、そこは、あううっ、だ、だめ、ああっ、お、おしり、いやあっ、あっ、ううっ、ぐ、んううっ！んっ、はあ、はあ、はあっ、う、うぐっ、ん、ああ、やあ、そ、そんな、奥まで、あぐ、んふうっ、お、ふうっ、ふうっ、ん、くうんっ、だめ、ナカで、響いて、ああっ、おしり、感じちゃう、ふああっ！」

男の股間から粘液を纏った太い触手が新たに生え、男の眼前で弱々しく、ふるふると震えているお尻の穴を捕えると粘液を塗りながらずぶずぶと挿入してゆく。二本目となる挿入にキャロンは思わず呻き声をあげるが、触手によるアナルセックスを何度も経験している少女の身体はすぐに順応し、妖しい快感を覚え始めてしまう。

「ああっ、あつ、あつ、あうっ、んっ、んっ、く、ふうっ、うっ、うんっ、はあ、はあ、はあっ、はあっ、んあ、あうはあっ、ああっ、し、子宮、叩かれて、もう、何も考えられない……ううっ、くっ、んっ、んんっ、はっ、はっ、はあっ、んああっ！」

男の注挿によってキャロンの蜜壺は蹂躪され、固い亀頭が少女の子宮口の最奥にある急所、ポルチオを幾度となくノックする。その最奥を叩かれるたびに小柄な少女の身体は揺さぶられ、内臓を押されて息を漏らす。そして肺から漏れる息と共に少女の思考は次第に白く霞んでゆく。注挿の振動で頭を揺さぶられて思考が飛び飛びになり、徐々に何も考えられなくなつて、今感じている快樂だけが真実となつてしまうのだ。

「はあっ、ん、ううんっ、んっ、んああっ！んうっ、そこ、だめ、そんなに、されたら、ああっ！おかしくなる、ひっ、ふあっ、あ、くうんっ！うっ、くうっ、あっ、あっ、ああっ！ああ、ダメ、子宮が降りちやう、はあっ、はあっ、ううっ、んつく、うっ、ああっ！」

後背位から上半身を倒してうつ伏せになり、尻を高く突き出している恰好のため、少女の秘部も尻穴も男には丸見えとなつている。男のモノと触手に蹂躪されている秘裂は蜜と潮にまみれてぐっしりと濡れ、注挿のたびにぐちゅ、ずちゅ、ずにゅ、ぶちゅん、と淫猥な水音を立てている。そして尻穴に潜り込んだ太い触手がモノと同時にピストンされ、二穴同時の責めになつていた。膣道と直腸を同時に圧迫され、少女の悲鳴に近かった喘ぎ声が次第に高く、甘く蕩けてゆく。

「あああっ、お、お腹、押されて、子宮に、響いちやうっ、あぐ、んあああっ！熱い、熱いのっ、はあ、はあ、ああ、激しいっ、おしりも、あそこも、触手に弱い所、同時に挟られて、感じ過ぎちやうっ、んああっ、あたしもう、ダメ、堕ちちやううっ！ああっ、それ、深いっ、な、ナカが、いっぱいっ、はあ、はあ、んううっ！」

触手がキャロンの手首に絡み、後ろへと引っぱる。これでキャロンは自分の頭だけで上体を支える体勢になってしまう。同時に挿入はより深くなり、更に注挿の振動を自分の頭だけで受け止めなくてはならなくなった。男が腰を振ってモノを突き入れるたびに、出産で骨盤が広がった影響で大きくなったお尻の柔肉がぶるぶると撓み、幾本もの触手が絡みつuitのままの豊かな乳房が母乳を溢れさせながらゆさゆさと揺れる。

「あぐっ、ん、んっ、んううっ、ああ、すごい、すごく感じちゃう、ああっ、アソコも、おしりも、おっぱいも、か、身体が、全部気持ちいいの、こ、こんなの変、うああっ、溶けちゃう、あたし、溶かされちゃうっ、ああ、はあ、はあ、はあんっ、んああっ！」

既に極細触手の侵入を許してしまっている子宮は快感に蕩け、精液を求めて降りてしまっており、ポルチオへの刺激をより深く享受してしまう。キャロンは数え切れないほどの絶頂によって敏感になった全身を性器のように触手で扱かれ、為す術なく愛蜜を吸われ、リバースの魔力を奪われて、快樂という甘美な毒の底なし沼に溺れ続ける他ないのだ。

「あううっ、んっく、んはあっ、はあ、はあ、あっ、ああっ、あたし、もう、ダメ、戻れなくなっちゃう、ああ、ああっ、んああっ、なのに、もっと、もっと犯して欲しいって、思っちゃう、ふう、ふう、ひい、んくうっ、ダメなのに、カラダが、悦んじやうっ、あっ、あぐ、ひうんっ、いやあっ、もう、イきすぎて、あたし、壊れちゃうっ！」

男のモノで子宮を押されるたびに胎の底から飲びが広がり、その多幸福感に耐え切れず、キャロンは喘ぎ声をあげ続ける。そうしてあられもない声をあげるたびに淫魔と同等の性質に成った肉体が全身で男に媚びてゆく。膣口は蜜でドロドロに蕩け、狭い膣壁は触手に馴染めながらも、きゆうきゆうと締め付けてモノを逃すまいと縫りつき、最奥は亀頭にキスの雨を降らせ、子宮口が降りてきて深く咥え込もうとする。少女は男を求める女という性の浅ましさに全面降伏し、欲望に敗北したというその事実にも昂奮してしまう。

「ああっ、や、きやあっ、あ、あぐうっ、ふ、深いっ……あああ、はあ、はあ、あ、んうっ、く、んうっ、ああ、はあ、はあ、う、うんっ、く、ふああっ、お、奥まで、届いてる、ううっ！あっ、ああっ、あはあっ！こ、これ、すごく感じちゃうっ！」

触手が後ろ手にしたキャロンの手を更に引っぱり、身体を起こさせる。男が床に胡坐をかいて座り、少女はその足の間に腰をすっぽりと収めて座る。両脚は大きく広げられて外に投げ出し、丁度背面座位の格好になった。今まで最奥に打ち付けられていたモノの深さを、今度は自分が動くことで味わうことになるのだ。

「はあ、はあ、はあ、うんっ、うっ、うあっ、く、はあっ、ああっ、な、ナカが、いっぱい、ああんっ、うっ、くはあっ、んんっ、うっ、んううっ、はあっ、んあっ、子宮に、届いちゃうっ、ああ、んっ、はあ、はあ、ああっ、一番奥、突き上げられるたびに、イっちゃうよおっ、ああっ、はあんっ！ううっ、くああんっ！あっ、んああっ！」

キャロンの正面には大きな鏡があり、肉欲に溺れて声をあげる自分の赤らんだ浅ましい顔が、男の手に揉まれてぐにぐにと形を変えながら悦んでいる淫靡な乳房が、太くて逞しい牡のモノを咥え込んで白く泡立った愛蜜を溢れさせる淫らな秘裂が、魔力を込めた触手に愛撫されて妖しく灯っている忌まわしい淫紋がはつきりと見えてしまう。しかもこの鏡は自分の痴態を記録し、自分の淫蕩さを証明しているのだ。鏡に気付いた少女の全身を羞恥心が覆い尽くす。しかし、恥ずかしいと思っても、逃れたいとは思えなかった。それは自分自身が既に快楽に溺れている事を認めてしまったからだ。

「か、鏡が、あぁっ、や、やだ、あたし、こんなに、エッチな顔して、セックス、してるの？あぁっ、はぁ、はぁ、すごい、あんなに乳首が勃って、おっぱい、いやらしい……赤い淫紋が、触手に絡みつかれて、あそこが、あんなに濡れて、ひくひくして……あたしのカラダ、犯されて、悦んでる……はぁ、はぁ、はぁ、あたしの、エッチな姿、あの鏡に記録されてるんだ……あぁっ、ダメ、すごく恥ずかしいのに、見られてるって思うと、カラダが熱くなって……あたし、昂奮しちゃってる……あぁっ、くっ、ううんっ」

自分の肉体が犯されて悦んでしまっている様を鏡に見せつけられ、少女の背筋にぞくぞくとした震えが走る。その感覚が、辱めを受けて感じてしまっているという事が、鏡を通して確認できてしまう。そうでなければ、鏡に映っている自分の顔があんなにもはしたなく蕩けている筈がないからだ。頬も耳も赤く、瞳は快感に曇り、目元は潤んで涙を漏らしている。唇は艶っぽく濡れ、喘ぎ過ぎてだらしなく緩んだ口元からは涎まで零し、舌が時折何かを舐めるように、物欲しげに蠢いてしまっている。そこに映っていたのは、王女でも、剣士でも、村の少女でもない。男に犯されて悦ぶ淫乱な女であり、性欲に溺れた娼婦であり、色欲を貪る発情した牝であり、快感を糧とする淫魔の姿だった。

「あぁっ、いやぁっ、大きい、来ちゃう、あぁダメ、止まらない、イクっ、イク、あぁぁっ！あううっ！んんっ、あつく、はぁあんっ、うそ、いったのに、あぁっ、まだイってる、あうっ、いき続けている、あぁ、あたし、変になる、あぁっ、ひんっ、あんっ、あぁんっ、な、ナカ、かき回しちゃ、いやぁっ、か、カラダ、おかしくなっちゃううっ！」

乱暴に、無遠慮に、容赦なく、牡のモノに突き上げられ、下半身を這う触手が蜜を吸い上げながら膣壁に体液を塗り込めてゆく。キャロンは自分の下腹部から際限なくこみあげてくるゾクゾクとした快感に抗えず、自分の肉体、その牝性に打ちのめされてしまう。身を振って悶え、あられもない声を上げて喘ぎ、一匹の牝になつてゆく。ラモー・ルーに快楽を教え込まれ、牡の味を知って牝に堕ちてしまったカラダは、男の逞しい肉茎の弾力を最奥で感じるたびに、じん、と響く甘い痺れを指先に至るまで拡散させ、少女は肉体を支配する快感にうっとりとして熱い溜息を漏らしながら、その痺れを味わってしまう。

「ああっ、はあ、はあ、んああっ、あぐ、うああっ、はあ、はあ、お、おねがい、イかせてっ！あたしを、もつとイかせてえっ！はあっ、はあっ、ああ、あううっ、も、もう戻れなくなるくらいに、あつ、あううっ、うんっ、あたしをめちゃくちゃにしてえっ！もう、どうなっても、いいのっ！あああっ！あたし、気持ち良くなりたいのっ！」

膣内を触手に觸られ、イき続けながら男のモノの形を覚えさせられる。男の肉棒に屈したという現実を言葉にして叫んでしまう。その一方で淫らに堕ちた身体は食欲に快楽を求め続けていた。上体を妖しくくねらせながら自らを深く貫かせようと伸びあがってはお尻を沈め、気持ちいい所にモノが当たるようにと腰をいやらしく振り、お尻を回すようにしてモノをねじり、淫紋が光る下腹をひくひくと蠢かせ、突き上げて来る触手の動きに応えてモノを呑み込み、締め付け、子宮口を亀頭へ擦りつけて射精へと煽り立てる。今、少女の身体はその全てが快楽を食うために活動していた。

「ふふふ、綺麗よ、キャロン。男に抱かれてイキ果てながら淫らに堕ちてゆく貴女が一番綺麗。ここで最後まで見ていてあげるから、もう一度孕むまで子宮を彼の精液でいっぱいにしてもらいなさい。そして、浅ましいイキ顔をあたしに見せてちょうだい」

玉座に座って二人のセックスを眺めているサラがうっとりとした顔で少女に嘲りの声をかける。孕まされる、という単語に反応してキャロンの肩がびくん、と震えるが、それもひと時の事で、すぐにモノと触手の突き上げによって頭を揺らされると理性は白い靄の中へ溶けてしまい、肉体は快楽の深海に引きずり込まれてしまう。

「は、孕む、ああっ！ぐ、うんっ！ん、はあっ、はあっ、うっ、ふあうっ！んあっ、あつ、ああんっ！ああっ！ううっ、うんっ、はあっ、ああっ、んっ、んっ、ああっ！もつと、もつと突いて、ああっ！あ、あたしのナカ、掻き回してえっ！ああんっ！ひやう、うんっ！ああダメ、ヘンになっちゃううっ！あああっ！いいっ、すぐいいのっ！」

男は激しく悶え続けるキャロンの動きを完全に手中に収め、その上で膣口と尻穴の両方から同時に、少女の身体が瞬間浮く程の激しさで突き上げ続けている。男の股間から伸びた触手は少女の尻穴を貫き、尻肉を揉み、花芯を抜き、膣口付近を舐め、下腹を這っている。また、乳房を揉みしだく手の平が口を開いて乳首に取り付き、母乳を吸い上げ始める。そして、魔力を纏った触手たちは少女の淫紋に取り付いて粘液を擦りつけながら魔力を注いでいる。淫紋は大量の魔力で満たされて完全に活性化し、忌まわしい赤色に輝きながら今なお、少女の肉体をより感じやすく、子宮を淫蕩に作り替え続けていた。



「ああっ、またおっぱい、吸われてる、うくうっ、あ、んはあっ、ああっ、く、クリトリス、擦られて、あううっ！弱いとこ、ばっかり、こんなの、気持ち良すぎて、すぐイっちゃうっ！あああっ！いいっ、はあ、はあっ、ああ、カラダが熱くて、どこ触られても感じちゃうっ、ああっ、あっ、あっ、あうんっ、ああっ、またイク、ううっ、んあああっ！」

触手によって淫紋に注ぎ込まれた男の魔力はキャロンの肉体を完全に覆い尽くし、少女の感覚は淫紋を起点にして湧き続け、全身を満たしてゆく快楽によって支配されてしまっていた。少女は身体がどんどん敏感になってゆき、自分の肉体そのものが性器になってしまったかのように感じていた。少女の膣内は熱く煮えて身体の奥でどろどろとしたマグマのようになり、自身の芯を貫き続けるモノを逃さないようにきゆうきゆうと握り締めて無数の濡れた肉襞で扱き続けており、子宮は飢えと渴きを露わにして口を開き、牡の射精を一刻も早く受け入れようとしていた。

「ああっ、はあ、はあ、うむうっ、んっ、んんっ、んう、んあ、あむ、むうっ、むぐ、んんうっ、んぐ、んっ、んぷ、ぷああっ、はあ、はあ、はむっ、んぐ、む、んふうっ、ああ、れる、れる、ちゅ、んむうっ、む、んっ、んぐうっ！ぐ、んんっ、ごほっ、ごほっ、はあ、はあ、ああ、すごい、ニオイ……ああ、アソコが、疼いちやう……！」

男の舌が伸びてキャロンの顔を舐めまわしながら唇に触れると、少女は自ら口を開いて男の太い舌を受け入れる。舌触手は少女の口を埋め尽くしながら注挿して少女の唇を犯し、口腔を犯し、舌を犯してゆく。既に蕩けきっている少女は男の舌によるフェラチオに対し、唇をすぼめ、涎をまぶしながら自らの舌を這わせて啜り上げ、やがて触手の先端が膣内で粘液を噴出させると、うっとりとした顔でそれを飲み下してしまう。

「やっ、ああっ、ぐ、うっ、はあっ、あああ、あっ、んあっ、な、ナカで、膨らんで、固くなってきた、あうう、ああっ、熱いの、来ちやう、うつく、んはあっ、だめ、だめなのに、やあっ、カラダが、熱いっ、あんっ、ああんっ、んううっ、あ、アソコが、燃えちやいそうっ、はあ、はあ、触手が、ナカでうねって、んくうっ！もう、ダメえっ！」

キャロンの膣内で男のモノが膨らみ、触手が蜜を吸い上げる速度が速くなった。射精が近い、と少女は白い靄に溶けた意識で他人事のように思った時、淫紋の奥で卵巣が疼いた。触手に口内を犯された時に男が飲ませた淫毒の効果で、排卵しようとしているのだ。また妊娠してしまうかもしれない、と少女は思ったが、子宮の飢えと疼きに抗うことは出来なかった。快楽に蕩けきった子宮は男の精液を受け入れようと待ち構えていた。自身の肉体を犯し、貪る牡に反応し、牝の身体は受精したがっているのだ。少女は自分の浅ましい牝性を告白するように射精を求めてしまう。

「あつ、はつ、はあつ、ああつ、来るつ、すごい、来ちゃう、ああつ、ダメ、これ、戻れなくなる、ううつ、はあつ、うあ、んああつ、はあ、はあ、はあつ、お、お願い、精液、欲しいの、あたしのナカで、射精してくださいっ、もう、どうなってもいいから、あイク、イっちゃうの！ああんつ、あぐ、ううつ、あうんつ！ああつ、イクっ！」

犯されながらリバースの力を吸い出され、淫紋に夜の魔力を注がれるという初体験の凌辱によってキャロンは数えることを諦めるほどに絶頂に追いやられてしまう。今の少女は絶頂のたびに数瞬気を失い、モノの突き上げによって強制的に覚醒させられていた。少女の意識は眼前でばちばちと瞬く快感電流と共に徐々に現実感を喪失してゆく。夢か現実かを判断できなくなった少女にとって、淫紋の奥から湧き上がってマグマのようにとぐろを巻き、肉体を内側から燃やし尽くそうとする快樂の炎だけが実感を伴うものになってしまっていた。少女は嵐に吞まれようとする小舟のように絶頂と覚醒の波を反復しながら沖へ進み、より高く、より深い、絶頂の大波を迎えようとしていた。

「ああつ、いいの、もつとして、やめないで、ああんつ！うつ、く、んんつ、はあつ、いいの、気持ち良いっ、すごい、こんなの来たら、あたし、ああ、あたしいっ、ああつ、あつ、ううつ、し、しあわせになっちゃう、ああ、欲しい、お願い、精液、くださいっ、子宮が疼いて、欲しくてたまらないのおっ！ああ、はあ、はあ、はあ、妊娠、してもいいからっ、あたしのナカ、いっぱいにしてえっ、ああつ、お願い、来て、来てえっ！」

沢山の襲がついた食虫植物のような触手に乳首を包まれて母乳を吸い上げられ、乳房を中心にぞくぞくとした快感が少女の上半身を渦巻き、勃起したクリトリスを細い触手で扱かれて、電流のような快感に下半身が痺れ続けている。そして大きく広げられた脚の付け根、トロトロとした蜜を涎のように零し続ける陰唇を押し広げ、男の逞しく、固く、熱いモノが少女の最奥目掛けて激しく突き上げ、子宮口を叩いている。三者の合流点である膣下、子宮で快感はらせんを描きながら際限なく高まってゆき、淫紋から湧き上がる熱が竜巻のように肉体の内側で暴走して絶頂の高みに向けて上り詰めてゆく。

「はあつ、ああんつ、んううつ、うつ、あつ、ひあつ、はああつ！も、もうダメ、がまんでできないの、お、お願いっ、くださいっ！ラモー・ルー様の精液、あたしのナカへ、いっぱい出してくださいっ！貴方の、熱い精液で子宮を埋め尽くして、あたしを、このいやらしい牝猫を、孕ませてくださいっ！はあつ、はあ、あああつ、ああ、もう、イク、すごい、来ちゃう！ふああんつ！はあ、はあ、はああんつ！ああつ、もつと突いて、壊れちゃうくらいに、一番奥、激しく突いてえっ！」

快楽に曇ったキャロンの瞳には鏡に映る男とラモー・ルーの区別がついていなかった。彼女にとつて至高の快楽を与えてくれる相手はラモー・ルーであり、必然、この魔族の男も、自分を犯し、絶頂に導いてくれる相手ならばラモー・ルーと呼ぶ他にないのだ。男はその呼びかけにも反応せず、少女の最奥をめがけて熱く滾った怒張を突き上げ続ける。少女は激しい突き上げに感じて幾度も背を反らし、首を振り、あごを跳ね上げ、ポニーテールを振り乱しながら男の腕の中で悶え、喘ぎ、嬌声をあげる。少女の理性は既に溶け落ち、逞しい牡の種を受け入れて孕み、子孫を残そうとする牝の本能だけが残っていた。

「あつ、ああつ、あんつ、はあ、はあ、ら、ラモー・ルー様つ、ああつ、はううんつ、好き、んつ、くうつ、ううつ、あつ、ああつ、愛してますつ、うつ、んんつ、はつ、あつ、んああつ！もつと、激しくして、ナカ、抉ってえつ、ああつ、堕ちる、あたし、堕ちちゃうつ！ほ、欲しいの、お、お願い、貴方の濃い精液で、淫らな子宮をいっぱいにして、あたしを絶頂させてえつ！ああ、イクつ、イっちゃうつ！はあつ、ああああつ！」

キャロンの懇願を待っていたかのように膣内を蠢く触手が一斉に蜜を吸い上げながら少女の身体を持ち上げると、一気に力を緩めて落下させた。逞しく反り返った牝の剛直がちゅつ、と蜜を飛沫かせる音を立てて肉茎の根元まで深々と少女を刺し貫くと、一番奥まで突き入れられたモノの先端から牝の身体の内奥まで深々と深々と少女を刺し貫くと、一番奥まで、濃厚な、牝を孕ませるための液体が堰を切った噴水のように一気に吹き上がった。

「あぐつ、んあつ、はあつ、ああつ、射精、来てるっ！ああ、すごい、ナカ、熱いつ、あたしもう、イク、イクの、イクつ、ああつ、あつ、イクうつ、ああああーっ！」

一番深く、激しい挿入、そして膣と尻穴の同時射精。その瞬間に、キャロンは一際高い悲鳴を上げて絶頂した。待ちかねていた子種を子宮に浴びせられ、胎を満たされてゆく。全身を駆け巡る途方もない快感に少女の総身が震え、弾けるようにあごを、背を、全身を弓なりに反らせて絶頂を受け入れる。牝のモノからどくどくと溢れて子宮へ注ぎ込まれる多幸福感、充足感、背徳感、そして快感。心が満たされ、全てを投げ出し、隷属してしまいたくなるほどの快楽の極地だった

「あぐつ、あつ、ううつ、熱いの、まだ出てるっ、はあ、はあ、あぐ、子宮が、広がって、イク、あつ、あああつ！、ああつ、またイク、ううつ、イツ、くうううううつ！はあ、はあ、どうして？いったのに、イクの、止まらないっ、あぐつ、ああつ、あたし、イキ続けて、壊れちゃうつ、ああつ、うぐつ、も、もう入らない、精液、こ、こんなに溢れちゃうたら、はあ、はあ、ああつ、受精しちゃうつ！ううつ、く、んんうつ！」

身体の芯へ浴びせられる熱い精液に満たされてゆく子宮。淫紋を中心にしてじわじわと湧き上がってくる充足感がこの凌辱を愛情あるセックスへとすり替えてゆく。精液に満たされ、今までの自分が消えてしまうような喪失感。キャロンは絶頂の嬌声をあげながら背後の黒い身体に手を伸ばすが、男は少女の小柄な肉体をしっかりと抱きしめて逃さない。射精は長く、股間のモノは精液を噴水のように吹き上げて子宮に浴びせ続ける。膣壁をぎゅうぎゅうと締め付けてモノから精液を絞り出し、余さずに子宮で受け止め続けながら、少女は動物的な衝動に身を任せ、涙も涎も、蜜も潮も、母乳や尿さえも垂れ流しながらあられもなく嬌声をあげて身悶え、自分の肉体を打ちのめし、それまでの価値観を壊してしまふほどの途轍もない絶頂の快感を表現し続けた。

「ラモー・ルー様、あああつ！お、お腹が、熱いつ、あたし、ラモー・ルー様の精子で、孕まされちゃうつ、あああつ！イク、イクつ、あぐ、んはあつ！子宮が、精液でいっぱいになって、溶けちゃう、いやあつ、まだイクつ、んくうつ！カラダが、いき過ぎて、戻れなくなっちゃう、んああつ！あ、あたしもう、消えちゃうつ、あああああつ！ダメ、イク、またイっちゃうつ！あううつ、イクうつ！ああつ、あああああつ！」

「……………ああつ……………んうつ、はあ、はあつ、は、ああ……………はあつ、ああ……………」

永遠とも思えるほどに長い射精が終わり、男のモノがキャロンの子宮に精液を吐き出し切ると、少女を拘束していた触手が解かれ、キャロンはゆっくりと触手で出来た床へ倒れ込み、絶頂から解放された。吐息は荒く、触手に精液を塗りつけられ、汗まみれになった肌は照りを帯び、湯気が漂っている。昂奮に膨らんだ乳房の先端、桜色に尖った乳首からは母乳が零れて床の触手に餌を与えている。子宮同様に大量の射精を受けた尻穴はひくひくと痙攣し、ごぼり、と逆流した精液を漏らしている。そして、少女の胎は男の濃厚な精液で埋め尽くされ、逆流が緩慢なためにまるで妊婦のように膨らんでしまっていた。その膨らんだ胎の位置にある淫紋は夜の魔力で満たされて忌まわしい程に赤く、煌々と光り、宿主である少女の性感を支配していた。

「コレデオマエハ、エイエンシニワタシノモノダ……………」

「……………はあ、はあ、はあ……………ああつ、ん、はあ、はあつ、ああ……………ん、うう……………」

絶頂から解放され、白い靄のような快樂の淵へと沈んでゆくキャロン。急速に薄れていく意識の中、自分を犯したこの男の声を初めて聞いたような気がした。

意識を失い、眠りに落ちたキャロンの側にサラがやって来る。絶頂に果てた少女は気を失っていたが、全身を襲った稲妻のような快感の余韻が色濃く残っており、尻や股間から精液がごぼりと漏れるたびに肌をびくん、と跳ねさせていた。

「ふふふ、素敵なイキっぷりだったわ、キャロン。もう聞こえてないでしょうけど」

いつの間にか鏡は消え去り、男も姿を消していた。股間から溢れた精液で石畳の床を汚しながら気絶している少女のあられもない姿を眺め、彼女は愉悦を深くする。

「本当はこのまま貴女をここで飼育して、蜜を絞りながら魔物の苗床にしてあげたいんだけどね、残念ながらあたしは復活したばかりで魔力がまだまだ回復にはほど遠いし、あの子も生まれたばかりで力も弱いし、まだ太陽にも耐えられないから、今日はここまでにしてあげるわ。その代わり……」

窓の外は徐々に白み始め、朝が近い事を伝えていた。サラは独り言を言いつつ、悩ましい吐息を漏らして眠り続けるキャロンのこめかみに指を据え、魔力を籠める。

「いいこと？貴女はここで起きた事を外に出たら忘れなさい。ここで起きた事の記憶はここだけの物よ。そして、今日と同じ月のない夜になったら、遊んであげるからまたここに来なさい。それまでは他の人に可愛がってもらおうといいわ」

意識を失い、抵抗できなくなっているキャロンは、サラの指から送られてくる魔力を感じて苦しげに呻くが、意識を失ったままではサラの術から逃れることは出来ず、再び催眠術にかけられてしまう。

「貴女の淫紋は起動したら、たとえ服を着ていようと牡には見えるわ。そして、淫紋を見た牡は例外なく欲望を焚きつけられて、貴女を犯そうとするの。それは人間も、魔物も関係ないわ。だから相手に困る事はないわね。思う存分犯されて、あたしたちに魔力を供給してちょうだい。ふふふふ……ははははははは！」

夜明けが始まり、薄明るくなり始めた石造りの広間にサラの高笑いがいっまでも響いていた。そしてその足元に、汗と涙、涎と母乳、愛液と精液にまみれ、意識を失った全裸の少女が横たわっていた。その少女の下腹部では、烙印のような淫紋が赤く、妖しく灯っていた。

朝、キャロンは自室のベッドで目を覚ました。裸で寝ていたのはよくあることなので何も思わなかったが、記憶にない太ももの赤いガーターリングと、下腹部に出来た見知らぬ痣が気になった。どこかでぶつけた記憶はなかったので不審に思ったが、擦っても消えず、痛みもないので少女は気にするのを止め、着替えに立った。

少女がその痣、淫紋の力を思い知るのには次の日の夜の事だった。

「ああっ、はあ、はあ、はあっ、な、何？これ……か、身体が、熱い……ううっ、く、んんっ、ダメ、た、立ってられない……頭が、くらくらして……はあ、はあ、はあ、だ、誰か……誰か来て、助けて……」

入浴を済ませ、寝室に入ったキャロンを発情が襲ったのだ。サラの神殿での記憶がない少女にとって初めての発情である。勝手に熱を帯び、敏感になってゆく身体に翻弄され、混乱のあまり、部屋の外にいる衛兵に助けを呼んでしまう。

「どうしました？キャロン王女……って、あ……」

声を聞きつけ、ドアを開けて部屋に入ってくる衛兵、マリオ。彼は月明かりの差し込む部屋のベッドの側で、顔を赤くして座り込んでしまっているネグリジェのキャロンを見てしまう。正確にはレースのネグリジェから覗いている、赤く染まった下腹部の淫紋を。そして、マリオの顔を見たキャロンは、無意識にネグリジェの肩ひもをずらして乳房を覗かせつつ、甘えたような声で呟いてしまう。

「……マリオ……お願い……欲しいの……」

少女の発情香を嗅ぎ、発動中の淫紋を見てしまったマリオの目は赤く染まり、キャロンの誘惑する声を聴くや否や、後ろ手に扉を閉めて鍵をかけると服を脱ぎ捨て、座り込んでいるキャロンに駆け寄って一息に抱き上げる。

「きゃあっ、マ、マリオ、どうしたの？そんな、乱暴に、いやあっ、や、やめて、お願い、ああっ！だめ、そんな、んううっ、お、おかしいわ、マリオ、ううんっ、はあ、はあ、はあ、来て……ああっ、破かないでっ、ねえ、お願い、いつもみたいに、あああっ！」

そして困惑するキャロンの声を無視してベッドへ乱暴に押し倒すと力任せにネグリジェを引き裂き、パンティを剥ぎ取り、瞬く間に全裸に剥かれてしまった無抵抗の少女の肢体へと欲望のままに襲い掛かったのだ。

「ああっ、だめ、ううんっ、や、あっ、あうっ、う、んんっ、う、うそ、いつもより、気持ちいい、はあっ、はあっ、ああ、ダメ、感じちゃう、来て、マリオ、来てえっ、ああっ、あっ、あっ、ああんっ、はあ、はあ、熱いの、カラダが、熱いのっ、お願い、もっと激しくして、あたしのカラダ、めちやくちやにしてえっ！」

マリオの豹変と性急な愛撫に戸惑うキャロン。しかし、淫紋に焚きつけられ発情した身体はあっという間に順応し、快楽を求めて疼き出してしまふ。少女は自分が淫紋に焚きつけられて発情していると理解しないままマリオに犯され、男の身体によって犯されているうちにセックスに夢中になってしまう。

「はあ、はあ、あああっ！あたし、すごく感じちゃう、あっ、ああっ、はあ、はあ、はあ、はあ、ううっ、んんっ、んっ、く、ふああんっ！もっど、もっど突いて！ああっ！すごい、ナカが、いっばいっ、奥まで、来てるうっ！ああ、イっちゃう！あたしも、イっちゃうよおっ！ああっ、あっ、はあ、はあ、はあっ、はあんっ、ああ、ううっ！」

灯りのない、月明かりだけが差し込む寝室で、裸に剥かれたキャロンは男の逞しい身体に組み伏せられて浅ましい声を上げ、汗を飛沫かせながら淫らに身悶えていた。男は淫紋の影響で我を失い、少女は淫紋の魔力で発情し、互いに肉欲を求めあう、本能のみが全面に出た、快楽を貪るためのセックスがそこで展開されていた。

「あっ、あっ、あっ、ああっ、はあ、はあ、あっ、あうっ、んあっ、はあっ、はあ、あっ、ああ、好き、好きよ、マリオ、はあ、はあ、お願い、ここ、もっど……んああっ！そう、そこ、ああんっ、いいっ、んんっ、んっ、んはあっ、お、おっばい、出ちゃうっ、あああっ！そう、吸って！あたしのおっばい、もっど飲んでえっ！」

淫紋の魔力に囚われてしまったキャロンは、発情した淫魔のように快楽を貪っていた。乳首を吸うマリオの頭を抱えて自らの乳房に押し当て、開いた両脚をマリオの腰に絡めてモノが抜けないようにロックし、腰を浮かせてより深い挿入を受けようとする。牝の本能に突き動かされるまま、少女は牝の逞しい肉体に足を絡めて縋りつき、愛蜜でトロトロに蕩けた膈内でモノを締めつけて扱き、射精を促していた。

「ああっ、はあ、はあ、はあんっ、ん、ううっ、はあっ、お、お願い、中に、ナカ出して！マリオの熱い精液、子宮にちょうだいっ、もう、イっちゃうからあっ、ああ、イク、はあ、はあ、はあっ、あああっ！あっ、ああっ、来て、来てえっ、んああっ！ああんっ、イク、イクっ、イクっ！ああっ、はあっ、ううっ、あっ、あああああっ！」

深く貫かれた自分の内側でマリオのモノが熱を持ち、どくどくと脈打つのを感じながら、キャロンは蕩けきった嬌声をあげて男の身体へ抱きついて射精を受け入れ、子宮を中心にして全身に迸り続ける快楽に押し流されるようにして、少女はオーガズムを迎えた。発情し、昂奮しきった頭の隅でマリオが低く呻く声を聴き、その一方で子宮に浴びせられた精液の熱さをはっきりと感じていた。

「あああつ！来てる、マリオの精液、ナカにいっぱい出てるうっ！ああ、熱いつ、イク、またイっちゃうっ！あああつ！すごい、来ちゃうっ！イクっ、イク、ううっ！んあああつ！あつ、マリオ、マリオっ、ああっ、イクうっ、あああああつ！」

その夜、キャロンとマリオは朝が来るまで食べるようにセックスをし続け、侍女が起こしに来た時には二人は汗と体液にまみれ、ベッドの上に裸のまま重なり合い、失神するように眠っていた。マリオは疲れ果てたように、キャロンは満ち足りた、幸せそうな寝顔だったという。

その後、キャロンは時折体が不調を起こし、その直後に襲われて犯されるという事が続いた。その不調が突発的な身体の発情によるもので、そのことが原因で襲われるという事までは分かったものの、自分の身体が何故発情してしまうのか、発情する原因は何なのかを突き止めることが出来ず、突然発情してしまう自分の身体と付き合い続けてしまう事になる。

そして、キャロンはある日、自分の中に月のない日の記憶がないことに気づいた。その日はいつも、昼食を食べた後に出かけ、そこから記憶がなく、次の日の朝を迎えているのだ。何かが起こっている、どうにかしないと大変なことになる。そんな予感がしてならぬのだが、少女はそれ以上どうする事も出来なかった。

そうして、彼女はまた月のない日の午後を迎え、キャロンは夢うつつのまま、忘れられた神殿へ自ら足を運んでしまう。そこで少女は我が子でもある魔物によって夜通し凌辱される。その魔物は少女のリバースの魔力を啜って力をつけ、やがてラモー・ルーを名乗る魔王へと成長する。自分がラモー・ルーを生み育ててしまっている、その事を、少女は覚えていないことが出来ないのだ……